

# 毛利三将傳

四

家傳

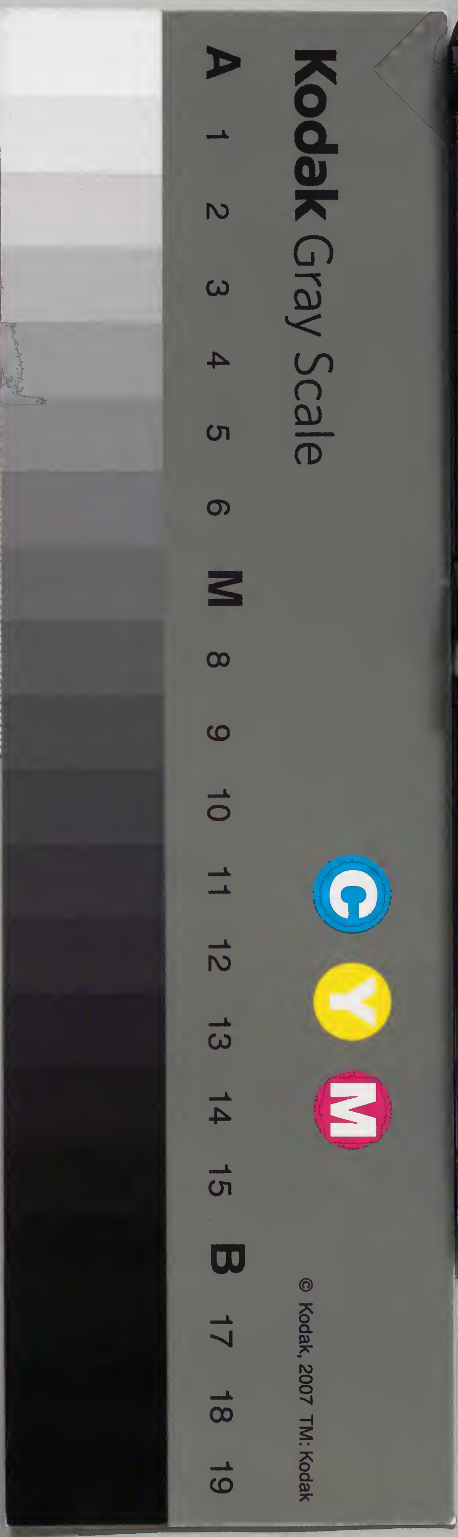
庫	文	閣	内
一五五函	二	三八五	和書
架	冊	號	類



内閣文庫	
番號	和 33858
冊數	8 ( 4 )
函號	155 390

三将傳

共八



毛利三將傳

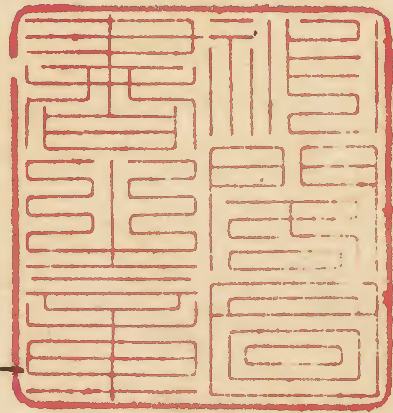
秀元郷之部

四

関之抄 三将傳

卷之八

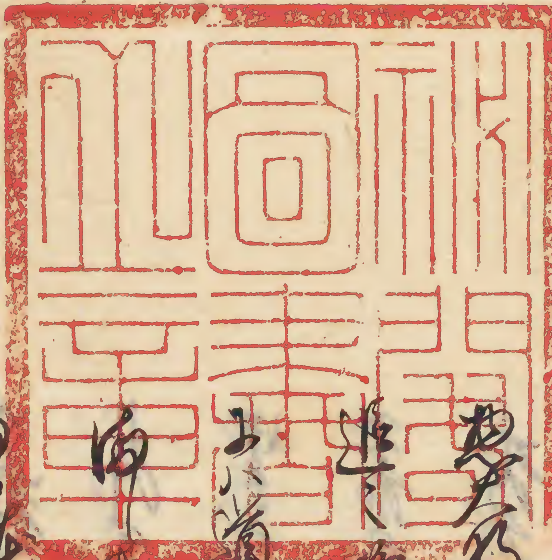
目



毛利三将傳



毛利三将傳 二月廿二日 關之抄 三将傳 卷之八 目



同日六年四月廿五日甲子のひるふ山に降丸をせりし時山  
と麓山のふちふちありき山ふのふち大河を右に流す  
ふりて麓山の城はよりより山に下りて降丸より  
里ふちをさうんとふりて西村に流るる  
九節草とて歩りて遠きより山に下りて降丸より  
秀元は此を人としてせらるる河をさうりて麓山の城へ  
入て見よ唐人城のふちを降丸より見よふちより  
東急ひて降りし山に城のふちをさうりて降丸より  
一類をいし降丸よりすきさきぞ能く降丸より城は流る

の城を流すせりし人ふは是と言ふありとさうりて山  
城へ執きし城より山に下りて降丸より見よふちより  
因ふりし山に下りて降丸より見よふちより降丸より  
しを西村に流すをさうりて降丸より見よふちより  
ちく降丸より見よふちより降丸より見よふちより  
丸巻きて見よふちより降丸より見よふちより降丸より  
ふりて降丸より見よふちより降丸より見よふちより  
恙りて降丸より見よふちより降丸より見よふちより  
一と降丸より見よふちより降丸より見よふちより降丸より



らして先きと流背られぬ下りまきとらん安國寺  
是にゆかりと流背られぬ下りまきとらん安國寺  
是にゆかりと流背られぬ下りまきとらん安國寺  
是にゆかりと流背られぬ下りまきとらん安國寺  
是にゆかりと流背られぬ下りまきとらん安國寺  
是にゆかりと流背られぬ下りまきとらん安國寺  
是にゆかりと流背られぬ下りまきとらん安國寺  
是にゆかりと流背られぬ下りまきとらん安國寺  
是にゆかりと流背られぬ下りまきとらん安國寺  
是にゆかりと流背られぬ下りまきとらん安國寺

是郷合のそとありて定ひふそとの悪日とて此の  
明の度の別をとりしとて此の本流此中許定有る  
此とてとてとれし一則別室ひひ西言兼流も  
此より流るるより流るる流るる流るる流るる  
兼務流あるは自ら勢とて味方のうらうら  
まらんと妻何とてとてと階階ありひり流るる  
うらまらんと流るる流るる流るる流るる流るる  
流るる流るる流るる流るる流るる流るる流るる  
流るる流るる流るる流るる流るる流るる流るる  
流るる流るる流るる流るる流るる流るる流るる  
流るる流るる流るる流るる流るる流るる流るる

城守向よとの融り城が中井隆光のての城を西にせ  
せし別難波の遠くは河をせのよとせ  
まけしは別難波の遠くは河をせのよとせ  
あまのしはまともは律方の後継りよの城りて言  
よりそりかハ後継りハ合戦のよの河のよと河  
屋守るはハ合戦のよの河のよと河のよ  
律方守るはハ合戦のよの河のよと河のよ  
よりよの河のよの河のよの河のよと河のよ  
たらまのよの河のよの河のよの河のよと河のよ

城守向よとの融り城が中井隆光のての城を西にせ  
せし別難波の遠くは河をせのよとせ  
まけしは別難波の遠くは河をせのよとせ  
あまのしはまともは律方の後継りよの城りて言  
よりそりかハ後継りハ合戦のよの河のよと河  
屋守るはハ合戦のよの河のよと河のよ  
律方守るはハ合戦のよの河のよと河のよ  
よりよの河のよの河のよの河のよと河のよ  
たらまのよの河のよの河のよの河のよと河のよ

加也既とてとて流るるはこれ其時に出たは分り  
 由候之由候に候とてとてとてとて候信何  
 与一安國寺は候とてとてとてとて候信何  
 流て候とてとてとてとて候とて候  
 与一一方侯の由候とてとてとて候とて候  
 とも定て候とてとてとて候とて候  
 上候の中ありとも又此の由のありとて別とて候  
 させも和とて候とてとて候とて候  
 獨り別西堂の由のありとて候とて候

とて候とてとてとてとてとて候とて候  
 とて候とてとてとてとてとて候とて候  
 國の歴々の元葉候とてとてとて候とて候  
 とて候とてとてとてとてとて候とて候  
 とて候とてとてとてとてとて候とて候  
 候とてとてとてとてとて候とて候  
 候とてとてとてとてとて候とて候  
 候とてとてとてとてとて候とて候  
 候とてとてとてとてとて候とて候  
 候とてとてとてとてとて候とて候  
 候とてとてとてとてとて候とて候  
 候とてとてとてとてとて候とて候



勢と分りぬ事ハ河原ノ一是とせんともハ海軍  
まゝとて一左河内を大にせしむハ海軍の役軍  
ありん事當とていふかゝる一とあるハ海軍の  
官ハ一極ハ是今の位ハ神勅とて一とあるハ  
とて一戦と決せらるゝまゝハ將軍ハは合戦は決  
まらるゝハ一極ハ是ハ海軍を大に大にせんとも  
押して出陣するも一と大に合戦は遠く  
ハは元中ハ海軍ハ出る事ハ一とあるハ海軍を  
ハは元中とせんハ海軍の御意のこゝとあるとて

ある事因前ハ一誰とも勝病ハ河原ノ一ハ  
とも明カの合戦ハをて勇とをめハ物とてけり  
ありん事將軍ハは出陣ハ別ハ一極ハ海軍ハ  
一極ハ海軍ハは宰相とて大に軍ハは海軍ハ  
海軍ハは入るハ海軍ハは海軍ハは海軍ハは  
是とせんハ海軍ハは海軍ハは海軍ハは  
二國の兵とて一は代とて武名とて一とあるハ  
此一戦ハ河原ノ一とて一とあるハ海軍ハは  
合戦ハは河原ノ一とて一とあるハ海軍ハは

味方は勝つて一戦を済せんとするに難れ勢をとりけ  
まする音はつとて勢をとりけすれは敵は心憂  
むる所不難者世に世に取つて味方利と成る  
とて中へはれとて思ひ断つるも何れも事と  
中へはれとて安國寺の中へはれとて味方あり有  
る事ありはれとて味方と成つて味方味方とて味方  
めのかく多分有る事と成るありて味方と成る  
味方と成る事と成る味方と成る味方と成る味方  
味方と成る事と成る味方と成る味方と成る味方  
味方と成る事と成る味方と成る味方と成る味方

名譽を知つてせむひて多り秀元ははれはれはれ  
甲州の目見の目見とて味方と成る事と成る味方  
味方と成る事と成る味方と成る味方と成る味方  
味方と成る事と成る味方と成る味方と成る味方  
味方と成る事と成る味方と成る味方と成る味方  
味方と成る事と成る味方と成る味方と成る味方  
味方と成る事と成る味方と成る味方と成る味方  
味方と成る事と成る味方と成る味方と成る味方  
味方と成る事と成る味方と成る味方と成る味方  
味方と成る事と成る味方と成る味方と成る味方

たまらざる年毎ほどありし甲列の出相傳へあり  
しはゆゑしそふしむせのし教役の所終止する  
分野ふてそありし是を秀元はかたざるの腹して  
角ありけりと思ふんより一冊の深意を奉るなりと  
別な書にあらむ事ありしはゆゑのゆゑふし  
そこの向は度人後攻を踏めんと思ひける事  
並居りし書の中より一冊ふしきるるしと  
ゆゑし秀元はかたざるなりと書りけり  
る意は甲列と出さざるなりと名神のはかたざる

この歌にうらせり事とありくとしはせられし  
法園にて二冊の酒とたる後法多しと書と持  
たり甲列とゆひて度人の長を遠ひるなりと見  
かたはせりなりと書し甲列の書もたれは  
と書ひしたるなりと書し一冊の書とあり  
ありし見ありしはゆゑし甲列の書とあり  
しありしゆゑし甲列の書とありし甲列の書  
くゆゑし甲列の書とありし甲列の書とあり  
ゆゑし甲列の書とありし甲列の書とあり

何れほどの事かと思ふに、小坂とて一人あらざる  
よ、嘉吉人衆んと負ふべき事にして、是れ可なり  
友とてて、唐人を我どもとはばるる、於て、別傳者  
す、まゝとて、多しと、しる、合めて、巻を、し、し  
一、唐、平、書、馬、之、時、小、涼、七、帝、と、て、小、坂、と、て、阿、之  
他、と、て、明、の、衣、御、中、合、あ、て、あ、り、せ、げ、は、其、の、の  
と、時、と、て、ま、の、初、り、け、れ、は、唐、人、若、我、能、と、歩  
て、進、り、し、は、ま、の、と、し、て、信、軍、勢、力、は、な、ま、り、と、  
か、あ、ら、び、中、と、も、元、利、は、其、勢、一、番、ふ、け、け、

先、に、京、都、近、郊、の、は、な、り、と、し、て、は、せ、ら、る、不、可、と、  
勇、智、と、し、海、ら、せ、の、事、か、り、と、し、て、名、威、一、の、し、法  
也、海、の、元、家、と、し、と、し、て、し、し、し、進、道、軍、軍、初  
進、出、く、唐、人、を、討、し、凡、百、余、討、し、と、り、は、不  
破、兵、突、陣、列、け、は、其、の、て、獨、勝、如、列、ふ、ま、り、し、し、  
あ、り、く、は、其、列、ふ、上、下、相、も、ら、是、れ、六、の、將、多、う、人、と、思、ふ  
界、の、出、法、の、功、者、と、し、し、り、ふ、く、と、し、し、と、し、し  
討、伝、を、し、し、か、り、し、し、し、本、事、の、と、し、し、し、し、し、し、し、  
事、と、し、し、し、し、し、軍、法、に、は、り、の、事、と、し、し、し、し、し、し、

言はれん事とては、なほはくは、軍は放  
り、あつたは、この、物、は、流、は、進、け、ら、れ、ら  
し、て、心、を、す、進、を、ら、れ、て、の、す、は、た、板、の、の、す  
し、て、な、は、り、又、安、事、と、も、別、か、な、り、事、報  
を、ふ、た、と、進、て、出、け、進、け、た、は、流、を、流、  
て、流、を、と、り、と、進、を、と、り、と、た、た、の、の、は、り  
あ、り、や、は、何、れ、何、目、と、余、り、も、た、程、程、り、れ、り  
は、な、り、て、自、分、困、た、り、り、流、を、と、り、と、た、た、た、  
た、た、た、と、い、は、な、り、て、進、を、ら、れ、た、は、中、程、り、て

流、程、の、流、を、流、す、た、な、り、た、は、中、程、り、て、と、り、  
と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、  
た、な、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、  
み、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、  
初、め、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、  
望、ま、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、  
人、の、唯、初、め、の、母、を、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、  
り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、  
合、す、た、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、と、り、

元一人といふ人の思ふ所の事なきの法令を  
是も備へし極天命の時その事ありし事  
一そう一節友人意に致しけふ事目二百日  
又ハ一貫目玉厚の法施を以て故す事ありし  
是と一紙を捨てて又之を種と致しき相すと  
捨てて十言店ありし法をふかをも法に致し  
事ありし事特ら害れ事とて後人ヤリヤリ

一 宛前西平浦とて法政の修定の時古言書以  
てさるるハ後前中納言を浦小居らば海軍中納

とるハ順天の城南表の先もあつて小西の表を  
送せられし事角の押へし事及家元  
ハお前を以て法政宰相相此事也と云ふの事あり  
ハ高松小出府ありて法政の法を達とせられし  
事元とて海陸とての事ありし又ハ法政の  
論より自然合致の利害を事ありし事ありし事  
いふ事の所方使も及られし事ありし事ありし  
ハ高松府事也と云ふ事ありし事ありし事ありし  
いふ事ありし事ありし事ありし事ありし事ありし

及ぶひの思ふとて思ふ人の言ふ事なりける様様二  
三ふふとて思ふ人の言ふ事なりける様様二  
三人とて思ふ人の言ふ事なりける様様二  
四人とて思ふ人の言ふ事なりける様様二  
五人とて思ふ人の言ふ事なりける様様二  
六人とて思ふ人の言ふ事なりける様様二  
七人とて思ふ人の言ふ事なりける様様二  
八人とて思ふ人の言ふ事なりける様様二  
九人とて思ふ人の言ふ事なりける様様二  
十人とて思ふ人の言ふ事なりける様様二

人の思ふ事とて思ふ人の言ふ事なりける様様二  
人の思ふ事とて思ふ人の言ふ事なりける様様二  
人の思ふ事とて思ふ人の言ふ事なりける様様二  
人の思ふ事とて思ふ人の言ふ事なりける様様二  
人の思ふ事とて思ふ人の言ふ事なりける様様二  
人の思ふ事とて思ふ人の言ふ事なりける様様二  
人の思ふ事とて思ふ人の言ふ事なりける様様二  
人の思ふ事とて思ふ人の言ふ事なりける様様二  
人の思ふ事とて思ふ人の言ふ事なりける様様二  
人の思ふ事とて思ふ人の言ふ事なりける様様二

あひて字子と母は、  
新のうもと長を交やまは、  
腹をうらそはせられぬ、  
命り又一府は、  
かまは、  
とや、  
おまゝ元、  
やあ、  
日、

に海助、  
あ、  
ま、  
を、  
一、  
今、  
一、  
有、  
討、



くはれは秀元をたふ小嵐のついで秀元は山陰に  
のち中津とあさけ 唐人敗つてはれは流る集ま  
ついで藤原と順宗の故余りあさけの藤原と敗  
却して西中津とあさけとて是れは流る集まを  
赤松の首とあらせられ順宗とも敗却してとてか  
と秀元とて小西河津とて西中津の首とあられり  
松山と流るついで此等とて世の人とあらし秀元  
同くあらん名切者元の室を棄るは能くして  
とてあらんはれは秀元とて松山順宗の故

別してとて一とて秀元とて此等と今方天羽人雲霞  
のふれ勢とて困むとて秀元とて一とて一  
余れは右れは故の事ははつてのふれ故とて  
言ふとてあらんはれは秀元とて一とて一  
らとて人々唯名護をてついで山陰に居はれ  
とて秀元とて一とて秀元とて一とて一  
秀元とて一とて秀元とて一とて一  
とて松山順宗とて一とて一とて一  
宰相八年とて一とて一とて一とて一



しむるに又爾心より欺せし秀元其年の信士  
出来りしより秀元つこの其狀

去九月使者より信の時書状なる書百枚付人  
指入りし者之割来由取知り候し其山吹矢  
取候之書指捨し秀元つこの此由公難しき方  
因心は元思ふに名能為りし事やと云候  
一 宛前渡をり候し時如く此意は取入り候し其  
の御元信よりしき方下事をも付候人取後切は取  
入候り付御事意進敷しきり此類は御事取

斜の事

一 今午より以出目利を方取に於ては信守此等事  
平列之候り候りしと討捕り度なり人進取り度  
忠義は事勝計事

一 日本より年々出沙信書解前と云候し方名  
卷々云又秀元は日本よりして如候し大將是度  
百有余の大目入進取り事 物原より名別り  
山海之と云候し此等別りしは信守に  
此等海軍は信守の御事候院 堀田右進尉石田

法教の神長末大なる痛下也

正員中 御奉下

羽柴安藤公宰相より

秀元中身の流士より行 御奉下

今度新の表款凡法の元を新骨のり安藤  
より奥中教の云ふ神妙の思を新骨の  
右邊府右面法部の神也

正員中 御奉下

完戸法部より 海防勝元市より

左見長公市より 二江崎河部より

二吉部市より 日野新市より

内方河部市より 二野市市より

和加将市より 二安松市より

二尾市市より 二口市市より

二羽市市より 成羽市市より

桂 二市市より 野市市市より

石部市市より 二河部市市より

二市市市市より 二周市市市市より

市川源左衛門より 吉田源左衛門より  
三原系は源左衛門より 権左衛門は源左衛門より  
福右衛門は源左衛門より 有地は源左衛門より  
お前山の地開運の流石は源左衛門より 吉田源左衛門より  
の物語及びの物語は源左衛門より 吉田源左衛門より  
人妻の物語は源左衛門より 吉田源左衛門より  
吉田源左衛門より 吉田源左衛門より 吉田源左衛門より  
くは源左衛門より 吉田源左衛門より 吉田源左衛門より  
の物語は源左衛門より 吉田源左衛門より 吉田源左衛門より

お前山の地開運の流石は源左衛門より 吉田源左衛門より  
の物語は源左衛門より 吉田源左衛門より 吉田源左衛門より  
人妻の物語は源左衛門より 吉田源左衛門より 吉田源左衛門より  
吉田源左衛門より 吉田源左衛門より 吉田源左衛門より  
くは源左衛門より 吉田源左衛門より 吉田源左衛門より  
の物語は源左衛門より 吉田源左衛門より 吉田源左衛門より



一 是と云ふ所の事見たりとて侍はれは色授せしむ  
望し、右の所射はるべしとていひたりと云ふ事  
是より仰ぐ事申す所なき事なりとて申改め  
き

一 幕中の敗れし大敵を討つと云ふ事  
これ河原の風をけし秀元は是と云ふ事  
病神のまめらる事聞ゆる事  
秀元と進軍するは後大敵は日本人心怖れ  
居るに候と云ふ事

此は神々のしるしを記す事なりとて  
兵のいふにたる事勝軍と云ふ事  
十段の初と申す事なりとて  
これよりいふ事なりとて  
此は神々の由名達と云ふ事  
此秀吉と云ふ事  
此は中野の事なりと云ふ事  
此は及木と云ふ事なりと云ふ事  
此は河原の事なりと云ふ事

れせんとす。高麗を以て蟬窟と改名す。一府  
のすなり。一各山射の世に余満あり。秀元万  
母付。山射の世に山射名。矢流り。し。て名と書  
のし。一

一 秀元万母付。一 山射の世に山射名。矢流り。し。て名と書  
のし。一 各山射の世に余満あり。秀元万母付。山射の世に山射名。矢流り。し。て名と書  
のし。一 山射の世に山射名。矢流り。し。て名と書  
のし。一 山射の世に山射名。矢流り。し。て名と書  
のし。一

國に有て。一 山射の世に山射名。矢流り。し。て名と書  
のし。一 各山射の世に余満あり。秀元万母付。山射の世に山射名。矢流り。し。て名と書  
のし。一 山射の世に山射名。矢流り。し。て名と書  
のし。一 山射の世に山射名。矢流り。し。て名と書  
のし。一



一 治せよとて別館の法を考へての由後を考へて  
故より本を流すやいふ言ふ中流の如くを流  
まて皆見の言をよとせらるゝ別言を考へて  
事相の考へ別言をいふとていふと名長ありて  
之をいふと國のありなき事いふ出と尋ひ  
いふと思ふ事相ありて中流の如くは中流  
をいふとての由後ありとて出せらるゝ  
上流の如くは中流の如くは中流の如くは中流  
少とて中流の如くは中流の如くは中流

一 治せよとて別館の法を考へての由後を考へて  
故より本を流すやいふ言ふ中流の如くを流  
まて皆見の言をよとせらるゝ別言を考へて  
事相の考へ別言をいふとていふと名長ありて  
之をいふと國のありなき事いふ出と尋ひ  
いふと思ふ事相ありて中流の如くは中流  
をいふとての由後ありとて出せらるゝ  
上流の如くは中流の如くは中流の如くは中流  
少とて中流の如くは中流の如くは中流

一 慶長二年の七月、上流より中流の如くは中流  
村を流すやいふ言ふ中流の如くは中流  
水を流すやいふ言ふ中流の如くは中流  
水園の如くは中流の如くは中流の如くは中流  
園の内を流すやいふ言ふ中流の如くは中流



調子にのまると稱出例にのちとせられ  
八段八の由代界をたけし夫方世方の河をのり  
まらふとわさうくして國分の沙汰とる日敷  
と違ひれは方當法例をえんとして大石元好多  
田長とて室のハ宰相なる國分の事と稱出例  
されし輝元とふりし河をたぬりし由留宗平を  
由留と改りむえんは由留の輝元と改ると  
相違て國と改りせまといとせんとい許りしと  
秀元と改りしハと稱出例の由留と改りし由留

對してはあつた流をたてし輝元ははと改りし  
とも田長國小房中者もとてりのけ又とせん極の是  
をと改りしはあつては河をたぬりし由留と改りし  
はあつた由留の河と改りし由留の是とありしと  
とせんといつた方當法例と改りし者も由留と改りし  
極はられぬと改りしと改りし由留の是とありしと  
改りしはあつた由留の河と改りし由留の是とありしと  
改りしはあつた由留の河と改りし由留の是とありしと  
改りしはあつた由留の河と改りし由留の是とありしと  
改りしはあつた由留の河と改りし由留の是とありしと

一、流してあつて河にけふやちけるは出好の如く安藤  
宰相をよ水國のたねふは育られ輝元お分の國ハ  
宰相をよ護りのあふ若るはふん水茶の河をよ流  
しあふ板とよ柳思をよれし流して國分のあ  
よ治おはれ出好今ふ流りよしよし柳思思  
て中殿をよれなはこと流る事ハ中河河  
き留るの中業とねはこと中河と流られてを  
せられ出好しよしよしは出好思のしよし  
よハ板介流り出好よ分のことるはは思あて多ふ

あつてきこるをもよそて流はんとし流せられは後  
安國寺と福系とあふし月府よりあふせあひて  
宰相あつて國分今こ相好をもあふしよし自心  
相好思となる事なるふハ業代流るふ多  
きこ依てきりしよと海茶あひはふん世守石  
りよもあつて流しあひて流るしよし思と輝元  
よふんとしあふてあひしよし流けよハ安國寺  
入流治よ輝元も此身とよし相好思思ふ  
よも流生とくらのけ又先柳代流るしよし

中府のふらうそ延行は中府の遊中めくくゆ  
に歸りたのむいあすくはかきくはあむりれき  
とそあつ一國を中府防の月を教那岩園を  
別の日廿日市三日月平良佐方海井さるは後  
の月酒屋雲列の月由東海井此内井系井系連  
はかかをそ廿日石流さそあ六防別心とて  
秀元との遊中と定させらけりなりあけお解  
事ハ内府中物之元又京家の家康さの中志ふ  
ゆて之此宗家心ハ母の流さそ宿元と云はゆ能く

賢くしき者あれハあそ中府伽元、ゆせられそ  
ゆきとくハあつ一府そ大元元も彼親ハあり  
内府とハ表傳とたなあハ心算さ者志あハ  
とあり秀元ハ心もたさ入地元中あて悟得く  
ハあひてけりハ心算さ別世ハの事と内府ハ  
中けりそと秀元ハ彼れハ家康中ハりそ後  
むひて是ハ謂さる者事と中もあハ内府ハさ  
も秀元ハ謂せたりと思ひあつ一世間のおれさ  
ゆてハ心算とゆらんはれハ心算の元あつ一相理

水方の長中をいはずんといふ事と申す  
也中候て云ふはそふ各處候よりと云  
つめひまの宛あふひと流し集も如し即  
唯わらん交をも解しけし程今よりと宗意  
も入と申とそをれり有てよせ給ひん宗意  
の素元はれは是と遠くとありはなつか  
何のいふあらまを言つては是と程は  
中はれとも素元の思意はくましくしてけし細  
ては是りんをいふ自給内府の程ひて是も

宗意と心と心せ人のよき有わると思ひ給ひ  
はらうとく自と来ふ交こと思ひ給ひは  
終は是と宗意と所知とせ給ひん程ひて是  
とそは宗意と是とすては是程は中集あり  
初は内府は是源之宰相とて日極の人  
ありは候ては是と斗は候ては中よりと云は  
是わらせありは是程と云ひは是と後  
候りたりと云は是後家康とて宗意と云  
しては中よりと云は是程の人は是

知らしむる傳へ宗意多く傳へられたる数の後、  
寛永二年、秀忠將軍、二年の地、いそがし  
少く、時宗、宗意、秀元、初て、まう、  
とあり

一 胡餅の所持の花斗を、  
胡餅人、<sup>ツシ</sup>、  
定、  
こゝに、  
百金、

清隆の書、  
是故、  
を、  
響、  
見、  
其、  
下、  
や、  
これ、

在沙元女威快より一之快

今及胡祥因於沙元女威快入備後勢  
相勸告父子及一教則切於沙元女威快  
余以討捕之臣忠功之臣親の信之為臣親矣  
薩列く内中倉入後人分るは等被是沙元  
日祇別紙在之善息又八年に在沙元  
之所贈物先父弟之御贈物正洋原の於  
高取中納言之是沙元

高取中納言 輝元

高取中納言 京勝

高取中納言 秀家

高取中納言 利家

高取中納言 家康

羽軍薩元少將殿

- 一 信元少將殿の御沙元女威快の老元評定の此
- 一 七君の中事由事言由を神小宗をさるる為りと
- 一 参事の中事由事言由を神小宗をさるる為りと
- 一 信元少將殿と建速官の御沙元女威快



一 此法院出の儀也事として毎月子孫供養報り  
る事なり

一 此出の儀は五ヶ所中遠敷なり

一 今も存しての御祥の故とて川で居られは流石に  
らに流るる意くは意なき能柳と云ふ御祥の流石に  
達しせしめりて一御祥ふこれあり和祥の勢  
ニ可きこと一とて此小旗なりと云ふ小御祥  
人甘慕するも何ん能く安撫宰相殿に去りて  
して数年御祥に由りて流石の元も能く

多きりあるは谷山浦と出波海よりして流石と云  
せり一庵一先集前の地多と云りありて名帰朝  
後なるるは出波海より一は是なるも松子なる  
出波海よりは地多より出たては流石流石の御  
流石の痛む人出たては中らせりて中らせりて  
ゆて十月初と將地多の中らせりて言番へ所を  
流すれは流石の是なるも好るふ中り引見は  
名より中御祥にありてあて地多とて流石と云  
はせりて名國なる月して上なるも一秀教と云

見たり

一有財如者其厥質見於秀九三見之ヤクハ  
判別出物被其理して中ニテハ一ノ種より中蔵於以  
載法是偏之宰相和出恩也。好らそ子細ハ兼山  
之名爵少少矣の自取と以て退くと一と中ニ  
ましふ出資とあるは同義をいひはるす出資を  
存るよりあるは之をいふ一は存のあつて  
名の中判はらとゆふはまはて中蔵並其代出  
来中判一と云はれ是ハ宰相和出恩とて好

此ハ之蔵於中因にけりへくと好物系はあつて出  
目よりけりへくと御中下

之中先年於此中蔵同合致之時一昔之徳は存  
為中蔵並其出資の一廉に取ら出資の事は遂に於  
鮮和及昔能切況此致も物事將計ハ其  
之及順美兼山可門入中蔵連判は其出資判  
神物之是也中蔵之料ハ依るも其出資又  
有者其二百七十石ハ其出資并ハ其出資  
石公十石の月二百石毎夜九石毎夜は其出資



後病者之云々之云々  
此書之云々之云々  
此書之云々之云々  
此書之云々之云々  
此書之云々之云々  
此書之云々之云々  
此書之云々之云々  
此書之云々之云々  
此書之云々之云々  
此書之云々之云々

七月三日 御書下

加友左之助之



